

I はじめに

平成18年度に改正された新教育基本法では、これまでの教育基本法の普遍的な理念を継承しつつ、その前文において「公共の精神」の尊重や、「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」、「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」の推進等を規定している。教育基本法の改正を受けて、学校教育法も一部改正され、各学校段階の目的・目標規定が定められるとともに、新たに義務教育の目標等が定められた。

昨年度より小学校で、今年度より中学校で完全実施となった新学習指導要領では、新教育基本法の方針と学校教育法の一部改正の内容が大きく反映されている。これまでの学習指導要領が基本としてきた「生きる力」の育成を理念として継承してはいるものの、新学習指導要領では、子どもたちの学習状況や生活状況をふまえ、知識基盤社会のなかでの「生きる力」として、①基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して自ら考え、判断し、表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し解決する力である「確かな学力」、②自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの「豊かな人間性」、③たくましく生きるための「健康な体力」を3つの要素としている。教育内容でも、伝統や文化に関する教育の充実や道徳教育の充実、体験活動の充実などが重要事項として改善された。

特に、道徳教育については、「道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」ものである。さらに、「教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、…」とあり、小学校では「自己の生き方について考え」を深めることが加えられ、中学校においては「道徳的価値及び人間としての生き方」から、「道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方」へと、両者の関係が明確に示された。

そんな中、昨年3月11日、未曾有の大災害をもたらした東日本大震災が発生した。世界中が大地震や津波、原発事故の恐怖を思い知らされたわけだが、世界中から多くの救援や励まし、善意が寄せられるとともに、日本人の暴動などを起こさない実直さや、「絆」を合い言葉に全国民が復興に向けて努力する姿などが見直された。

しかし、この大震災により多くの尊い命が失われたり、住み慣れた土地から遠く離れなければならない人々が多数出ることになったことは忘れてはならなし、教訓として後世に語り継がねばならない。本県は震災の中心地ではないが、少なからず被害があり、中心地で被災された方々の受入もしているなど、震災を経験した被災県としてこの教訓を伝える責務を感じずにはいられない。

そこで、本県の小学校で実践された「女川町の小学生との交流活動」及び、中学校で実践された「震災の教訓を生かした安全なまちづくり構想の授業」という、いずれも道徳教育との関連を図り、豊かな人間性を育む心の教育を目指した二つの事例を紹介することで、

被災された方々のご不幸に少しでも報いることができれば、また、研究主題に迫ることができれば幸いである。

Ⅱ テーマ

「豊かな人間性を育む心の教育
～震災に向き合って心を育てる教育の実践～」

提案者 栃教協教研推進委員会教員部

Ⅲ 主題設定の理由

2011年3月11日午後2時46分。すべての日本人にとって忘れられない時である。東日本大震災では、東北地方を中心に未曾有の災害をもたらし、人々の生活は一変した。私たちの住む栃木県においても、地震により校舎が使用できなくなったり、体育館が避難所になったり、被災した児童を受け入れたりする学校もあるなど学校生活に少なからず変化をもたらした。

「今しか学べないことがある。今だからこそしなければならない教育がある。」

かつてない災害を経験した私たちは、この悲劇を忘れずに、こんな時にこそしなければならない教育を地道に継続して行っていくことが責務であると考えた。災害に負けることなく、強くたくましく生きていく力を身に付け、また、相手の立場を考え行動できる児童・生徒の育成を目指し、以下のような仮説を設定した。

Ⅳ 研究の仮説

日本人の心と心の結びつきを題材にすることで、「豊かな人間性を育む心の教育」が実践できるのではないかと考えた。体験活動を生かした授業、さらには、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、社会科の授業を関連づけた実践こそが、全日教連のテーマにつながると考えた。

V 研究の実際

〈小学校における取組〉

～女川町おながわの小学生との交流を通して～

栃木県塩谷町立玉生小学校 阿久井克清

1 はじめに

本校（玉生小学校）のある塩谷町は、平成9年度より、宮城県女川町と「海の子・山の子交流事業」（トム・ソーヤ' Sキャンプ）を実施してきた。この事業は、海のない塩谷町の子供たちを海のある町（女川町）に連れて行き、そこの子供たちとの交流会やキャンプといった体験をしながら、自立心や好奇心を高め、仲間づくりを通して豊かな心を育てることを目的として、14年間実施されてきた。



トム・ソーヤ' Sキャンプ I N女川（平成21年度）

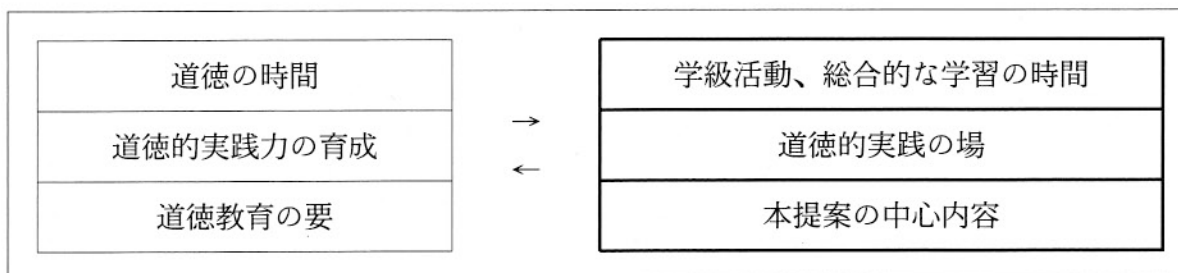
「女川町の海岸で楽しく交流する子供たち」

しかしながら、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、女川町は壊滅的な被害を受け、平成23年度の本事業はやむを得ず中止することとなった。予定では、塩谷町の子供たちが女川町を訪れるはずであった。

今まで行われてきた形での交流は実現できなくなってしまったが、「心の交流」を継続するための活動を町や学校で行うこととなった。

これらの交流活動（学級活動、総合的な学習の時間）や道徳の授業を通して、「豊かな人間性を育む心の教育」を充実させようと研究を進めた。

本提案の位置づけ

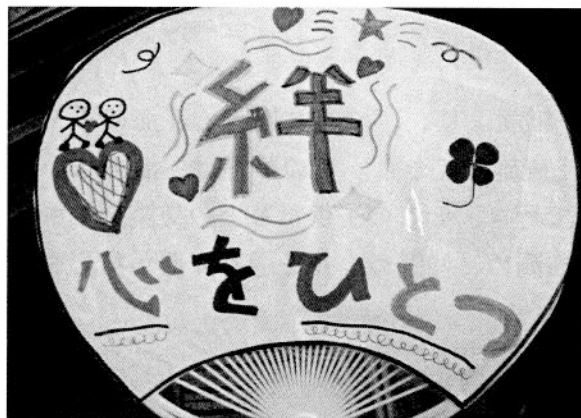


2 研究の実際

(1) 交流活動

① 「応援うちわ」の作製、贈呈（町としての取組）

塩谷町子ども会連合会・異世代交流サークル「えんがわ」と連携し、町内各育成会に呼びかけ、女川町の小学生約500名分を作製目標にした「応援うちわ」を作製することとした。



塩谷町の子ども達が復興の願いを込めて作製したうちわ

◎ 贈呈式

日 時 平成23年 7 月 6 日(水)

会 場 塩谷町立玉生小学校

来訪者 塩谷町教育委員会事務局、学校教育課長

女川町教育委員会教育長、小学校長 2 名、事務局校 2 名

※この贈呈式の様子は、下野新聞に掲載された。

〈下野新聞の記事より〉

(平成23年 7 月 7 日)

東日本大震災で被害を受けた宮城県女川町の小学生に「応援うちわ」を贈ろうと、町子ども会連合会と異世代交流サークル「えんがわ」などが同町全児童分のうちわを作製。6日、修学旅行の下見に町を訪れた同町の遠藤定治教育長らを玉生小に招き贈呈式が行われた。

町と女川町は1996年から「海の子山の子トム・ソーヤズキャンプ」として、小学5、6年生を対象に1年交代で派遣交流を続けてきた。しかし、今年は震災の影響で見送りとなった。

「えんがわ」は、小学生同士の「心の交流」は継続させようと提案。子ども会連合会と協議し、同町の全児童に暑い夏を乗り切ってもらおうとうちわを贈ることを決め、各育成会の協力で476個を作製した。

うちわには町内の児童が「心一つに」「みんなで応援しているよ」など励ましのメッセージやイラストを思い思いに書き込んだ。「早く復興してほしいとの思いを込めて絆の文字とウサギの絵を描きました」と玉生小6年の手塚奈津美さん。

贈呈式では、代表として同小6年生の斎藤なつみさんが「心のつながりを続けていけたらと思い、心を込めて応援うちわを作りました。このうちわを使い私たちのことも思い出してほしい」とあいさつ。遠藤教育長は「みなさんのうちわと女川を思う気持ちを町の小学生に届けます」とお礼を述べた。



贈呈式の様子（玉生小学校校長室）

② 女川町と塩谷町の小学生の交流（学校としての取組）

◎ 女川第一小学校 6 年生との交流〈学級活動〉

※女川第一小学校の 6 年生が修学研修の際に、玉生小学校を訪問してくれた。

期 日 平成23年 9 月 7 日(水)

会 場 塩谷町立玉生小学校

参加者 女川町立女川第一小学校 6 年生

塩谷町立玉生小学校、船生小学校^{ふにゅう} 6 年生

内 容 ・ 歓迎セレモニー

・ 会食

・ 交流活動……女川町の紹介（震災からこれまでの様子について）

塩谷町の紹介

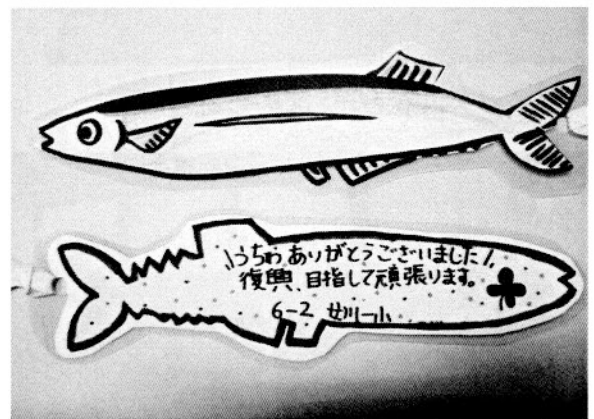
ゲーム活動（名刺交換）

プレゼント贈呈 女川町から サンマ型のしおり

塩谷町から 千羽鶴



会食の様子



プレゼント（サンマのしおり）

〈歓迎の言葉〉

女川第一小学校のみなさん。遠いところおいでくださいましてありがとうございます。わたしたちは、みなさんとお会いできるのを楽しみにしていました。

わたしは、昨年「トム・ソーヤ' Sキャンプ」の交流活動に参加しました。女川第一小学校のみなさんの中にも参加された人がいると思います。昼間は、川遊びや泥遊びなどのゲームを楽しみ、夜はキャンプファイヤーをしました。同じ部屋に泊まって、夜遅くまでたくさんお話をしました。とても楽しかったことが今でも心に残っています。今年も、また交流できてとてもうれしく思っています。

しかし、3月の震災以降、みなさんはとてもたいへんな思いをしてこられたと思います。震災でたいへんな被害を受けたことを知ってから、

「今、姉妹都市である女川のみなさんのためにわたしたちにできることは何だろう。」と考えました。そして、まず全校生・全町民をあげて募金活動に取り組みました。でも、ほかにできることはないだろうかと日々考えています。

今回このように交流する機会があり、本当にうれしいです。せめて、今日がわたしたちにとってもみなさんにとっても思い出深い一日となればいいなと思います。

一日でも早くもとの生活にもどれることを願っています。わたしたちは女川のみなさんをずっと応援しています。



女川第一小学校 6年生の発表



玉生小 3、4年生によるダンス



ゲーム活動（名刺交換）



プレゼント贈呈

◎ 手紙を通しての交流〈総合的な学習の時間〉

※9月13日、訪問してくれたお礼と励ましの意味を込めて、女川第一小学校の6年生に手紙を送った。

〈手紙の内容（一部抜粋）〉

- ・ぼくは、地震や津波のことで元気をなくしていると思っていました。でも、みんな元気すごいなと思いました。
- ・地震の後の津波の被害の写真を見て、今でも起きたことを受け入れることができません。わたしたちは、みなさんのために募金などできることはずっとやっていきたいと思います。
- ・会食のときは、女川小学校のみんな、先生方と給食の話や学校の話をしました。千羽鶴をプレゼントしました。ぼくたちの気持ちが伝わるといいなと思いました。
- ・すてきなサンマのしおり、大切に使います。
- ・女川第一小学校のみなさんは、わたしたちよりもつらい思いをしているのにととてもうれしそうな笑顔を見せてくれて、一人も泣かずに仲良くしてくださってありがとうございました。

※卒業を目前にした平成24年の1月に女川第一小学校のみなさんより、お礼の手紙が届いた。

〈1月に届いた手紙の内容（一部抜粋）〉

○ 担任の先生より

- ・明けましておめでとうございます。6年生のみなさん、そして、先生方、お元気ですか。

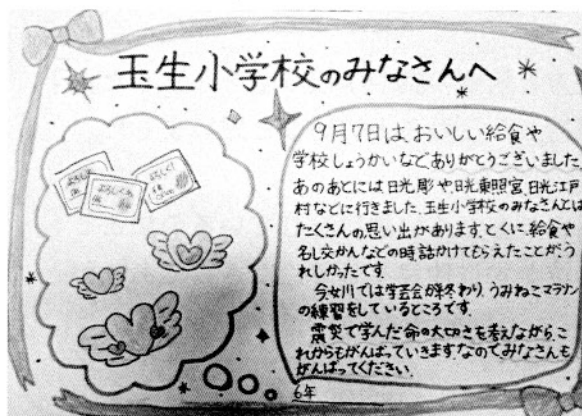
昨年9月には、修学研修の際に、お忙しい時期に交流会を開いていただき、本当にありがとうございました。玉生小、船生小のみなさんとの交流会は、子どもたちにとって本当に思い出に残る時間となりました。また、その後、みなさんの気持ちのこもったあたたかいメッセージも送っていただきました。

修学研修1日目の交流会後は、「星降る学校 くまの木」さんにお世話になり、一夜を過ごしました。2日目には、日光彫りの体験をしたり、東照宮を見学したり、日光江戸村で楽しく遊んだりしました。3日目は、東武ワールドスクウェアとりんどう湖ファミリー牧場に行き、栃木県での2泊3日を満喫することができました。みなさんとの交流会をはじめ、一つ一つの活動が本当に楽しく、忘れることのできない修学研修となったことに感謝いたします。

修学研修後、たくさんの方々に支えられ、励まされ、震災に負けずに例年とほぼ同様の教育活動を行うことができました。6年生のみなさん、本当にありがとうございました。これからは、お互い、卒業へ向けて、小学校生活6年間のまとめの時期となりますね。悔いの残らないように、一日一日を大切に過ごしていきましょう。「感謝の気持ち」と「希望」と、そして「夢」を忘れずに頑張っていきましょう。

○ 6年生より

- ・女川町は今、前の女川町のように明るい町になるようにがんばっています。また、栃木に遊びに行ったときはいっしょに遊ぼうね。
- ・たくさんのお手紙ありがとうございました。修学研修では、美味しい給食を食べたことが一番の思い出です。今、女川では、二階建ての仮設住宅が完成して、三階建ても建設中です。女川町は少しずつ復興に向けて頑張っているので応援してください。



女川第一小学校の6年生から届いた手紙

(2) 道徳の時間

① 主題名(ねらい) 感謝の心 内容項目2-(5)

日々の生活が、人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえようとする心情を育てる。

② 資料名「地震で学んだこと」 出典(文溪堂「6年生の道徳」) 〈別紙〉

③ ねらいとする価値

人間は、互いに支え合って生きている。まったく一人だけで生活を営んでいるということはない。

しかし、少子化が進み、生活が豊かになった今日では、支えてもらっていることを感じ取りにくくなり、世話をしてもらうことを当たり前のことと受け取りがちで、世話をしてくれる人々に対する感謝の気持ちが薄らいでいる。

身の回りの人々の行為に目を向け、感謝する心を育てることは、人々の役に立つ生き方をしようという気持ちを育てることにつながる。「助け合って生きている」と言うことに気付き、人々の支えに感謝して、自らそれにこたえようとする心情を育てたい。

④ 授業の流れ

学習活動(主な発問)	教師の支援・留意点
ア 3月11日、大きな地震が起きたとき、あなたは、どんなことを感じたり、考えたりしましたか。	・資料の内容ができるだけ身近に感じられるように、地震のときの様子を思い起こさせる。
イ お兄さんは、どんな気持ちで神戸にかけつれたと思いますか。	・困っている人の役に立ちたいというお兄さんの強い意志を押さえられるように、当時の交通網が混乱していたことを伝える。
ウ もしあなたが、「明子さん」だったとしたら、お兄さんが帰るときどんな言葉をかけますか。	・お兄さんに感謝し、支えてくれた人々の思いにこたえようと決意する明子に共感させる。
エ 地震などの災害によって困っている人や十分な生活ができない人に対して、あなたにできることはどんなことがありますか。	・女川第一小学校との交流を通して、感じたことや考えたことと関連させて、具体的に実行できることを考えさせる。

〈発問アに対する児童の反応〉

- ・こわかった。
- ・びっくりした。
- ・家がたおれなかったか、すごく心配だった。
- ・家族は無事だろうか。
- ・家族に会いたい。

- ◆ 初めて体験した大きな地震に対する恐怖とともに、家族を心配する気持ちを多くの児童がもった。

〈発問エに対する児童の反応〉

- ・不足している物を送る。
- ・節電に協力する。
- ・募金に協力する。
- ・千羽鶴を送って、励ます。
- ・被災した地域の生産物（食品など）を買って、支援する。
- ・わたしたちが、元気に明るく、いつも被災地のことを考えて生活する。
- ・被災地の人と話をしたい。（話をする事で、不安な気持ちを和らげてあげたい。手紙を書いて励ます。元気づけてあげたい。）

3 実践の反省

被災地の小学生と直接的な交流ができたことは、本校の児童にとって、たいへん貴重な体験であった。特に、女川町の小学生の元気に明るく活動する姿や前向きな姿勢に深く感動した。本来ならば、こちらが勇気や希望を与えなくてはならない立場だと思うが、反対に「がんばらなくてはならない」という気持ちを抱いた。

道徳の時間では、交流活動を体験したことにより、「地震などの災害によって困っている人や十分な生活ができない人に対して、あなたにできることはどんなことがありますか」の問いに対し、物的な援助だけでなく、「話をしたい」「手紙を書いて励ましたい」などの素直な気持ちが表れたと思う。

4 終わりに

平成24年度は、「女川町の復興を最優先に」という考えのもとに、具体的な子ども達の交流活動は実施されない。しかしながら、多くの児童が「また、トム・ソーヤ' S キャンプでをやってほしい」と願っているところである。

またいつの日か、海の子と山の子が集い、たくさんの笑顔が女川の海に戻ってくことを信じている。

いつの日か女川の海に子供たちの笑顔が戻ることを信じて！



〈別紙〉 「地震で学んだこと」

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分、兵庫県南部で地震が発生した。国内観測史上初めて震度7を記録したこの地震は、兵庫県を中心に大きな被害をもたらした。約25万戸の家がたおれ、30万人以上の人々が学校や公園などで避難生活を送った。また、4万人以上がけがをして、6千人以上の人々が亡くなった。

ドドーン！ガンッ！バリバリバリッ！

地震だ！

わたしはおどろいて目を覚まし、頭からふとんをかぶって体を縮めた。ゆれが収まると、一階からお父さんとお母さんのさけぶ声がした。

「明子、どこにおる！」

「だいじょうぶか！早く外に出よっ！」

暗やみの中、手さぐりで探し当てた上着とズボンは、何かの下じきになっていた。思い切り引っ張って、パジャマの上に着た。

家の中は、たおれた家具や本などでめちゃくちゃになっていた。お父さんとお母さんに助けてもらいながら、階下に下りて外に出た。

見慣れた町が変わり果てていた。電柱が折れ、家やへいがたおれて道をふさいでいる。わたしの家も、となりの家がたおれかかって、かたむいている。

あちこちから助けを求める声が聞こえた。わたしとお母さんは、先に小学校に避難することにして、お父さんは、声のする方に走って向かった。

ガスのにおいがする中、手で口をおさえて急いで歩いていると、東の空にほのおが見えた。親友の浩子ちゃんが住んでいる方角だ。だいじょうぶだろうか、と不安になった。

避難所になった学校の体育館は、避難してきた人でいっぱいだった。

「あっちゃん。」

名前を呼ばれてふり向くと、浩子ちゃんだった。

「あっちゃんは、どうやったん。」

「だいじょうぶやったで。でも、となりのうちがたおれてきていて危ないねん。」

もっと話したかったけれど、二人とも胸がいっぱいで言葉が出てこなかった。

避難所での生活が始まった。夕方になって、食事が配られるという全校放送が流れた。わたしは、列に並んで待った。かけつけてきた大勢のボランティアの人々が、てきぱきと食事を配っていた。初めての食事は、一枚のパンだった。

翌日、水道が止まっていたので、給水車が来て、水の配給が始まった。この水を、歯をみがいたり、顔を洗ったり、トイレに流したりするために、大切に使った。

毛布や衣類も配られた。毛布の中には、ボランティアの人々が被害の少なかった地域を回って、かき集めてくれたものもあったそうだ。その夜、わたしはその毛布にくるまってねた。

一週間ほどたつと、避難所で生活する人々も、食事の準備をする「朝食係」「夕食係」や、水が出ないトイレにプールの水をバケツで運ぶ「トイレ係」というように、仕事を分担して受け持つようになった。

そんなある日、わたしは、一人で小さな段ボール箱をいくつも積んで運んでいる大学生くらいのお兄さんを見かけた。

「手伝います。」

思わず声をかけると、お兄さんは笑顔で答えた。

「ありがとう。一つ持ってくれるかな。」

段ボール箱を運びながら、お兄さんと話をした。お兄さんの話し方が神戸や大阪の人とちがうので、どこから来たのか聞いてみたら、東北地方だという。地震のことをニュースで知って、やってきたのだそうだ。

仮設テントに着くと、お兄さんは、

「どうもありがとう。助かったよ。また何かあったらよろしくね。」

と言って、段ボール箱に入っていた救援物資の仕分けを始めた。テントでは、たくさんの人々が、額にあせをうかべて配給の準備をしていた。

わたしは、いてもたってもいられなくなった。それでわたしは、浩子ちゃんと相談して、お兄さんたちの手伝いをするようになった。

しばらくして、お兄さんが帰ることになった。わたしは、浩子ちゃんといっしょに、お兄さんを乗せた車が見えなくなるまで見送った。

浩子ちゃんが、ぼつりとつぶやいた。

「わたしたちも、何かやろうか。」

わたしは、大きくうなずいた。

「ボランティアの人たちがいなくても、がんばらなくちゃ。」

さっそく避難所にいた友達に声をかけて、「子供ボランティア隊」を作った。そして、避難所のごみ拾いをしたり、小さな子供の遊び相手になったりした。

一人暮らしのお年寄りや、けがや病気で体を動かせない人の代わりに配給を取りに行くこともした。配給の案内放送を聞きのがすと迷惑がかかるので、責任が重い。とても緊張する役目だった。

大変だったけれど、ボランティアをした後には、いつも気分がすっきりした。お兄さんたちも、こんな気持ちだったのだろうか。

わたしたちの町に、生活に、明るさがもどってきた。ボランティアの人々や、救援物資や募金などを送ってくれた大勢の人々が、わたしたちをはげまし、支えてくれたことを、わたしは決して忘れない。

～「まちづくり」の構想に東日本大震災の教訓を生かして～

栃木県岩舟町立岩舟中学校 森口 尚志

1 研究の仮説を受けて

栃木県岩舟町では東日本大震災が起きたとき、学校の北側に位置する岩船山が大きく割れるという災害こそあったが、幸いにも被害を受けた家庭はほとんどなかった（資料①）。そのため被災地の人々が力強く立ち上がっているようすを比較的近い距離で冷静に見聞きすることができる。こうした地域の特性を生かして、3年生社会科（公民的分野）で「震災に向き合う」授業を実践することで、「豊かな人間性を育む」ことができるのではないかと考えた。

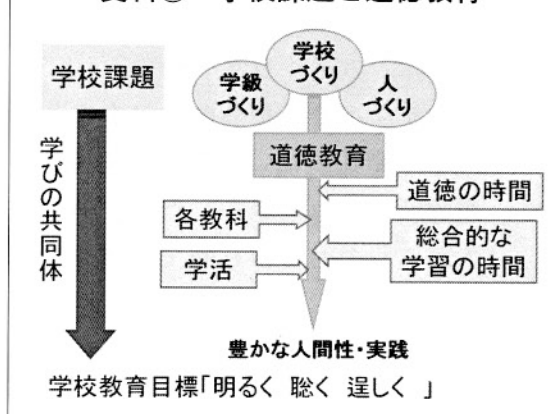
資料① 震災関連の事前調査結果

- 1 岩舟町役場より
 - ・震災による死傷者＝0人
 - ・震災による一時避難＝22世帯
（うち21世帯が転出済み）
 - ・被災による扶助＝3世帯
- 2 本校3年生での聞き取り調査より
 - ・親戚が被災した生徒＝2名
（死傷者0人）

2 学校課題との関連から

岩舟中学校は、昨年度、学校課題に「学びの共同体」のスタイルを取り入れて、学習の協同性を生かしながら学校教育目標に迫ろうとした。話し合い活動を学習の多くの場面に取り入れて、学校づくり、学級づくり、人づくりを図ろうとしたものである。話し合い活動が成立するためには、互いを尊重し合おうとする「豊かな人間性」が必要不可欠である。そのため、道徳の時間を要とした道徳教育を各教科や学活、総合学習でも充実させていくことが必要であると考えた（資料②）。そのような学習活動を効果的に実施するために、道徳の時間と教科学習等をリンクさせることを考えた。社会科で震災関連の内容を扱うことから、道徳の時間などでも震災関連の資料を扱うことができないかと考えた。

資料② 学校課題と道徳教育



3 授業の構想

(1) 社会科（公民的分野）の構想

本校は震災の被害を受けた家庭はほとんどなく、中学生という年齢から、ある程度の悲惨な状況を受け止められると思われる。そこで社会科では、「地方の政治と自治」の単元に、震災の教訓を生かして、「非常時に強い安心して暮らせるまちづくり」を考えようという発展課題を設けた（資料③）。一般に「まちづくり」というと、地域

の活性化を図ろうとしたものが多いが、今回の授業では、「震災の教訓を生かす」という趣旨から、高齢者や子供に配慮した「まちづくり」を意識させて授業を実施した。

資料③ 単元名 地方の政治と自治（7時間扱い）

時 数	内 容	題 名
1 時間目	地方公共団体の行政のしくみ	「わたしたちと地方自治」
2 時間目	地方財政のあり方	「地方分権と住民参加」
3 時間目	地域づくりの意義	「市町村合併と地域づくり」
4～6 時間目	地域づくりの方法（発展課題）	「岩舟のまちづくりを考えよう」
7 時間目	単元のまとめ	「わたしたちと日本の政治」

〈発展課題のねらい〉

- 地方自治の趣旨に則って、積極的に地域づくりに参加しようとする態度※①をもつことができる。
- 住みよいまちをつくることや非常時の備えなどについて、具体的なプランをより良く考える※②ことができる。
- 新聞等の資料※③を読み取り、自分たちの課題に必要な部分を文章や図で活用することができる。
- 自分たちが暮らす地方公共団体（岩舟町）の行政、歴史、文化、自然などに関して、今までより広い知識と深い理解をもつことができる。

（補 足）

※①…自分たちの住む地域に誇りをもち、将来の地域がより暮らしやすい町となるよう発展を願い、貢献しようとする態度を育てたい。改正教育基本法でも、「社会の形成に参画」できるようにさせることを教育の目標として掲げた（第二条）通りである。

※②…広島県の復興計画（次頁 4-(1)参照）や小山市「思川駅周辺地区まちづくり通信」を参考資料とした。①と関連して、単なる「産業の発展」とか、「人口の増加」を意識した計画性・実行性に乏しいまちづくりのプランを考えることは避けたい。

※③…下野新聞、朝日新聞「震災特集ののちゃん」の自由研究」など

(2) 道徳の時間の構想

社会科のねらいにせまるために、事前に、被災した人々の心情を理解し、自分たちが何らかの役に立とうとする前向きな心を育てておくことが肝要であり、そのためのベース（根っこ）となる道徳の授業も実践すべきと考えた。道徳の時間の資料とねらいとする道徳的価値については、岩舟町教師の会（道徳部会）や下都賀地区中教研（道徳部会）において提供されたもの



資料④ 出典

を用いることにした。二つの資料が提供されたが、今回の授業ではどちらを用いることが適切なのか、栃教協教育研究推進委員会教員部会（以下、「栃教協教研部会」）で検討した。

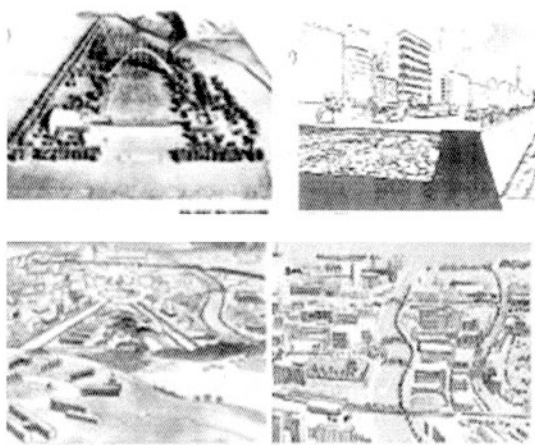
協議の結果、「家族愛4-(6)」をねらいとして、「頑張るぞ俺達家族！」（つなみ被災地のこども80人の作文集『文藝春秋8月臨時増刊号』）（資料④）を資料に用いることにした。さらに栃教協教研部会で指導案も検討し、本校の第3学年担任に説明・協力依頼し、全クラスで道徳の授業を実施した。



4 組織的な取組

(1) 社会科の教材について

栃教協教研部会において、「震災の教訓を『まちづくり』に生かすという授業構想からすると、被災地の復興を考えることになるのではないか。その際には原爆が落とされた後の広島復興という事例が参考になるのではないだろうか。」といった提案が出された。資料を探したところ、広島市の復興都市計画が市民から寄せられたという資料（資料⑤－広島市HPより）などがあり、まちづくりの参考資料として用いることができた。



資料⑤ 社会科資料（広島の復興計画）

(2) 道徳の資料について……資料とねらいとする道徳的価値

幸いにも震災を扱う授業の提案を二人の方から頂くことができた。

ア 「命を懸けた防災無線」（資料ア－(1)、(2)参照）

- ・平成23年8月8日、岩舟中学校において、岩舟町教師の会道徳部会研修会で、講師の小山城南小学校木村康子教諭から資料と指導案を提供して頂いた。資料は産経新聞の記事である。講師から「命を落としている」直接の資料だけに、扱いを慎重にすべきとの示唆があった。
- ・学習指導要領内容1-(2)「より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ」に基づいた主題である。

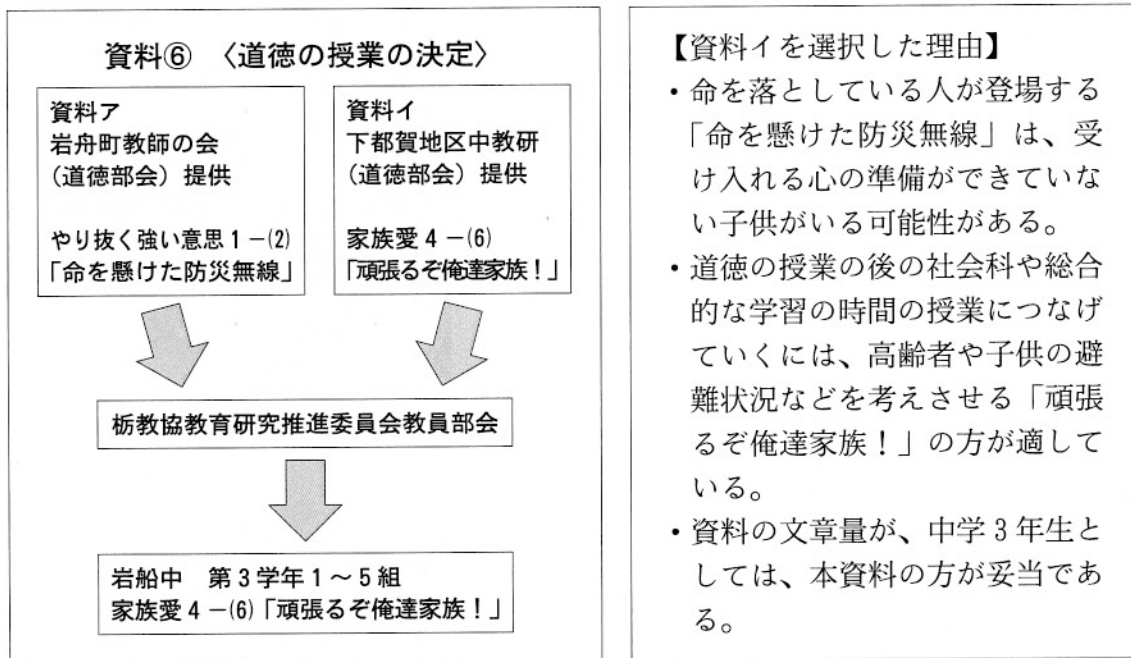
イ 「頑張るぞ俺達家族！」（資料イ－(1)、(2)参照）

- ・平成23年9月15日、栃木南中学校田中由貴教諭が下都賀地区中教研道徳部会において道徳の研究授業を実践した。資料は、『文藝春秋8月臨時増刊号』「つなみ

被災地のこども80人の作文集」から採っている。

- ・田中教諭の指導案は「自分と家族との関わり、家庭生活の在り方が人間としての生き方の基礎であることを十分に理解できるようにさせたい」としている（学習指導要領内容4-(6)「家族愛」）。

10月5日の栃教協教研部会において、「命を懸けた防災無線」と「頑張るぞ俺達家族！」のどちらの資料及び授業内容（ねらいとする道徳的価値など）が今回の授業実践に向いているかを検討し（資料⑥）、資料イを下記の理由で選択した。



(3) 道徳の授業について……中心発問

どの場面で、どのような発問にすることで、ねらいとする道徳的価値にせまることができるのか、栃教協教研部会において提供して頂いた指導案を検討した。その結果、「俺」の気持ちを追いつけながら、避難所で家族全員がそろったときの「俺」の気持ちを考えることが生徒にとって考えやすいのではないかという結論に至り、中心発問を以下のように変更した（資料⑦）。

資料⑦ 〈道徳の時間の発問の流れ〉

- 1 走るのをやめてしまった母に「ふざけるな！」と怒鳴った俺はどんな気持ちだったろう。
- 2 妹を見つけて、真っ暗な中で一夜を過ごした時、俺はどんな気持ちだったろう。
- 3 学校に迎えに来てくれた父に再会できた時、俺はどんな気持ちだったろう。
- 4 (原 案) 避難所で8人そろった家族は、夜を徹してどんなことを話し合っただろうか。
↓
(部会案) 避難所で、家族8人そろって一夜を過ごしているときの俺は、どんな気持ちだっただろう。

(4) 総合的な学習の時間（総合学習）について

岩舟中学校第3学年では、学年体制で取り組んだ道徳と社会科の実践を生かし、学年全体で行う総合学習の後期の全体テーマを「岩舟町への提言」として、レポートを作成する学習を行った。各自のテーマで岩舟町の実態調査を行い、それに基づいて明るい岩舟町の将来をつくるために、どのようなことを行ったらよいか考えた。

5 授業の実際

(1) 社会科の授業の実践

「学びの共同体」の授業を進めるということで、グループで話し合いながら、ワークシート（資料ウ、エ参照）に記入していくことを主な学習活動にした。

自分たちの身近な地域について、子供なりの自由な発想で、経済・福祉・環境などいろいろな角度から具体的に岩舟町のまちづくりについて考えることができた。そのため話し合い活動も活発に意見を出しあい、ほとんどの子供たちが協力し合って楽しそうに課題に取り組むことができた。



(2) 道徳の授業の実践

栃教協教研部会での話し合いに基づいて指導略案（資料オ参照）やワークシート（資料イー(2)参照）を作成した。

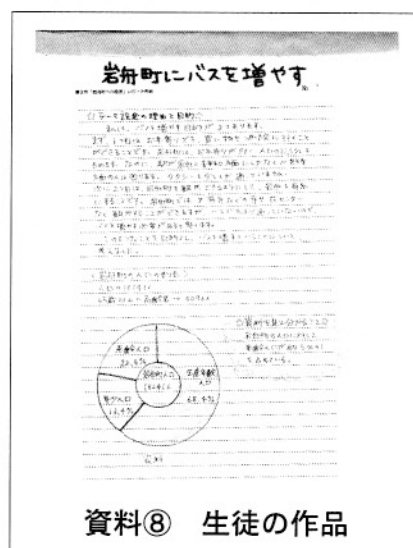
「頑張るぞ俺達家族！」の資料は、生徒と同世代の少年が書いた文章であり分かりやすく、切実感のある内容なので、生徒はしっかりと考えることができ、熱心に授業に取り組んでいた。本音を正直に言うことが難しい年齢でありながら、優れた資料を扱ったことと効果的な授業展開が功を奏して、素直に家族の有り難さなどを答える生徒が多かった（資料カ参照）。



(3) 総合的な学習の時間の実践

震災を教訓にして岩舟町の問題に対して前向きに取り組んだ（資料⑧）生徒が多かった。

選んだテーマは良かった（資料キ参照）が、資料として扱いやすいものが手に入りにくかったことなどから、充実した作品に仕上げられた生徒が予想よりも少なかった。



6 実践の成果と課題

(1) 成 果

道徳の実践の成果で、社会科や総合学習の授業は、高齢者や子供への配慮を忘れずに防災や公共施設の建設などの計画を考えることができた生徒は多かった。こうした学習が、さらに郷土への愛情を深め、実践的な力となることを信じたい。

また、これらの授業のベースとなる心情を育むための道徳の時間の実践も、3年生すべてのクラスで行われ、組織的・計画的な意義のある取組であったと思う。

今回、多くの方から資料や意見を提供して頂きながら本実践が作り上げられていった。研修会等の機会を与えて頂いたからであり、研修会等に参加することの大切さと楽しさを味わうことができたのも大きな一つの成果である。



(2) 課 題

社会科では話し合い活動や表現活動が多かったために、グループや個人の差が作品に大きく反映した。丁寧な学習支援や学習環境づくりが一層必要であろう。また、ワークシートの「まちづくり」のプランニングに切実感をもたせようとして費用の予算を立てる学習を試みたが、細かすぎて時間がかかり過ぎてしまった。そうした理由などから、生徒は多くの資料を十分に使いこなすことができず、作業の際に用いることができない生徒が目立った。資料活用能力の育成や単元計画の再検討が必要である。

道徳や総合学習なども、多くの方々の協力を得て作り上げた実践であるが、これを今回だけのものにせず、改善点を修正してより一層効果的な学習を繰り返していくようにすることが最大の課題である。

〈命をかけた防災無線〉

(産経新聞 改稿)

今回の津波で、1万7千人の人口のうち、8千人もの行方不明者が出た宮城県南三陸町では、大きな揺れの後にくる津波の襲来を予測して、高台への避難をひたすら呼びかけ続けた一人の若い女性がいました。

町役場の防災放送の担当職員だった遠藤未希さん（24歳）です。彼女は、昨年7月に結婚したばかりで、この秋に披露宴を挙げることを楽しみにしていた町役場の職員でした。勤続4年目の昨年4月、危機管理課に配属されました。介護の仕事に就くことを考えていましたが、両親の希望を聞き入れ、町職員の仕事を選びました。

「6メートルの津波が来ます。高台へ避難してください。」

防災庁舎の2階の部屋から流される、冷静で落ち着いた彼女の声は、大地震の大混乱の中でも人々があわてないように、一語一語ははっきり分かるようにていねいに何度も何度も繰り返し呼び掛けられました。

やがて、予想をはるかに超えた大津波が南三陸町を襲い、未希さんが放送を続けていた防災庁舎も大津波に飲みこまれ、庁舎に残っていた職員と一緒に3階屋上部分まで押し流されてしまいました。後に、未希さんの母親は、「(大津波に襲われて)放送が途中で途切れた。」と避難した知人から聞かされました。最後の方は声が震えていたといいます。

彼女は、襲いくる津波の恐怖と闘いながら、最後の最後まで町民の命を救うために力を尽くしたのです。

そして、大津波に飲み込まれてしまった未希さんは、他の20人の職員らとともに、そのまま行方不明になってしまいましたが、その後、捜索隊の懸命な捜索の結果、震災後2か月近くたって、沖合の海で遺体となって発見されました。

彼女の必死な呼びかけを聞いて高台へ逃げて助かった町民たちは、

「防災無線がなかったら、逃げていなかった。」

「あの声ははっきり覚えている。あれがなかったら、もっとたくさんの人が亡くなっていた。」

「自分の命と引きかえに町民を助けた。天使の声だと思っています。」

と、町民のために最後まで責任を全うした彼女の声を、「天使の声」と呼んで、彼女の責任感の強さとその勇気ある行動に心から感謝しました。

このようにして、彼女は自分の命と引き換えに、多くの町民の命を救いました。それは、彼女の責任感の強さと、町民を思いやる優しさが成し遂げた奇跡です。だからこそ、未希さんの「天使の声」は、今もお復興を目指す町民の心深くに留まり、生きる勇気を与えているのです。

資料ア－(2)

道徳ワークシート〈命を懸けた防災無線〉

- 1 介護の仕事に就くことを考えたが、両親の希望を聞き入れ、町役場に勤めることを選んだ未希さんは、どんなことを思ったでしょう。

- 2 6メートル強の大津波が襲ってくることが分かり、防災無線を放送することになった未希さんは、どんなことを思っていたでしょう。

- 3 「避難してください」という防災無線を聞いた町の人々はどんなことを思ったでしょう。

- 4 迫りくる大津波を目の前にしながら、命の限り叫び続けた未希さんは、どんなことを思っていたでしょう。

- 5 自分の立てた目標をめざし、役割や責任を進んで果たそうと頑張り抜いたことはありますか。それはどんなことですか。その際、どんな気持ちになりましたか。

- ☆ 今日の道徳の授業の感想を書きましょう。

石巻市 鈴木 啓史(ひろふみ)

平成二十三年三月十一日、俺は恐ろしくて苦しくて俺はこの日を、一生忘れない。俺は六人兄弟の次男です。この日、俺は学校が休みでした。弟と妹が風邪で学校を休んで寝ていました。

一番下の弟が幼稚園から帰ってきた時、ぐらつとゆるい地震が起きました。「またいつもの小さい地震か」と思い、逃げもせず座っていました。段々と揺れが強くなっていききました。父が「全員外に逃げるー」と大声で言ったので、家族全員で外に逃げ、地面にしゃがんで揺れが止むのを待ちました。更に段々と揺れが強くなり、この時俺は、この揺れはいつまで続くのだろうか。日本が沈没するのでは...と恐怖感でいっぱいでした。

長い間、揺れた地震が止み、また大きな揺れがきたら大変なので、車の中に毛布や飼っていた犬を入れました。父は落ちた電球のかげらを拾い、母が小学校に弟を迎えに行き帰ってきたところで、放送で大津波警報が発令し、避難するよう指示が出ました。しかし、いつものように津波なんて来ないだろうと甘く考え、俺たちは地震の後片付けに夢中になっていました。隣のおじさんの「津波が来たぞー、早く逃げろー」近所の会社の所まで来てる、早く早くーという声にびびりして見に行くと、すぐ近くまで小さな波と大きな波が押し寄せてきていて、俺は弟達を連れ、走りしました。

道路は逃げようとしている人の車で渋滞していました。父は、「早く降りて、早く逃げろー」と、車に乗っている他の人達にも声を掛けながら走り出しました。逃げていた途中、妹がはぐれてしまい、母が、大きな声で「うらら(妹の名)と呼びながら、津波が向かっている家に戻ろうとしました。父が、「何考えているんだ。津波が目の前まで来ているのに、死に行くのか。うららは先に走って逃げたはずだから。大丈夫だから早く走れー」と母に言い聞かせ、俺たちは再び走って逃げました。

津波はすぐそこまで来ていました。母は津波に追われながら、最後尾で泣きながら、女川に仕事に行っていた兄や家で飼っていたフットの犬二匹、見当たらぬ妹の名を呼びながら走り出しました。しかし、途中で母が「だめだ、もう走れない。無理だ、あきらめろ。みんなのことお願いね」と言いつて、走るのをやめてしまったのです。俺が「何ふざけた事を言ってるんだ。津波がそこまで来るんだぞー走れーがんばって走れー」と言うと、また少し走り始めました。でも正直言うと俺も、もう間に合わないかもしれない。全員津波にのみ込まれてしまうのではと不安でたまりませんでした。

小学校の所の歩道橋に上がり、そこで妹を探したのですが、見つかりませんでした。妹を探しに、母がまた家に戻ろうとしたが、疲れきっている母ではこれ以上無理、津波に確実にのみ込まれて死んでしまうと思い、母に「俺が妹を見つけてくるから。大丈夫だから。」と言って、小学校に向かいました。

俺は人生でこんなにも全速力で走った事はないというくらい無我夢中で走り続けました。小学校の体育館でやっと大泣きしている興奮状態の妹を見つけました。何があってももう妹の手を

離さないぞと思っていた瞬間、体育館にも津波が入ってきて、俺は妹を背中におんぶして人波をかき分け、校舎に向かいました。しかし、みるみるうちに波が押し寄せ、あつという間に腰まで水につかりました。やつの事で校舎に入り、妹を落し着かせました。段々と暗く、そして寒くなり、真暗な中で家族と離れて連絡もとれない中で、不安で不安でたまらない一夜を過ごしました。

次の朝早く、小学校の保健室に熱の出た妹を頼み、腰の上まで水につかりながら、家族を探しつつ、自分の家まで行ってみました。その途中、水に浮かんだ逃げ遅れて死んだ人達や、車に乗ったまま死んでいる人をたくさん見ました。

家にたどり着いた時、昨日まで家族みんなで住んでいた家の現状を見て、涙が止まりませんでした。「俺はもしかして津波で死んでしまっただけで地獄に突き落とされたものでは？」と思うくらい町の様子は悲惨なものでした。

家族にも会えず、がっかりして妹のいる小学校まで戻りました。二日目の朝早く、飲まず食わずで疲れきって泣きだくなっていた時、父が水につかたままケガをしながら、俺達を迎えに来てくれました。涙をこらえ、「ありがとう。みんな無事で大丈夫だった？」と素直な気持ちで言えました。父は、「うららの事を守ってくれて、ありがとう。」と言ってくれ、三人で母や弟が待つ近くの避難所まで歩きました。

二日ぶりに会った母は、泣きながら「ありがとね、二人とも大丈夫だった？お腹空いてるでしょ？」とビスケットを4枚渡してくれました。母に、女川で仕事をしてた兄の事を聞くと、「女川町全体が無くなったらしいから、多分お兄ちゃんも生きていないかもしれない。」と泣きながら話してくれました。

何日かぶりに友達に会ったと、抱き合って「大丈夫だったか？家族は無事か？」と合言葉のようになり、必ずそんな言葉を交わします。そんな日々を避難所の中学校の体育館で過ごしながら、夜ろうそくの明かりをたよりに家族でかたまつて話をしていると、ふいに母の名を呼ぶ声が聞こえました。母が返事をすると、そこには死んだと思っていた兄の姿がありました。「やっと女川から歩いて帰ってきたと、五日振りに帰ってきた兄の姿を見て、母は抱きついて大泣きし、父は「これで家族全員みんな揃った」と大喜びしました。久々に家族八人で、朝方まで色々語り合っ、一夜を過ごしました。

いつもケンカばかりしていた兄ですが、こういう状況になると、生きていくだけでよかった、と本当にそう思います。

この津波で、俺は大切な物をたくさん無くしました。まだ避難所暮らしですが、津波に追いかけるながらも生き延びた命、これから何事にも負けず、一生懸命生きていきたいと思っています。



資料イー(2)

道徳ワークシート

3年 | 組 No. 氏名 A.S.

「石巻市 鈴木啓史さんの作文」から

- 1 走るのをやめてしまった母に、「何ふざけた事を言ってんだ!」と言ったときの俺は、どんな気持ちだったのだろう。

母には絶対に生きていてほしいからめづめづしいで一緒に走ろう
という気持ち

- 2 小学校で妹を見つけて、真っ暗な中で夜を迎えたときの俺は、どんな気持ちだったろう。

両親や他の兄弟たちは無事に逃げられたのわかって
いざ酒にする気持ち
また大玉に地震が来たらどうしよう

- 3 学校に迎えに来てくれた父に再会したときの俺は、どんな気持ちだったろう。

父が生きているよかった
けがをしたが迎えに来てくれたうれしかった

- 4 避難所で、家族8人そろって一夜を過ごしているときの俺は、どんな気持ちだったろう。

家族が誰一人として欠けることがなくそろったのうれしいかった
普段はケカしにりして嫌なこともめるけど地震や津波で
家族と家族の大切なやありがたさが感じられた
☆今日の授業を通して、「家族」ということに対して、改めてどんなことを
考えましたか。そうではなくても感じられる子はいっぱい持っているよ。
普通に生活していると何も感じないかもしれないけど
いざとなったら他の誰よりもかけがえのない
存在だと思う

資料ウ 〈社会科のワークシート〉

MISSION

「岩舟の良さを生かしつつ、将来性のある、非常時にも強いまちづくりを。」

◎東日本大震災を教訓にして、非常時にも負けない「まちづくり」を考えよう 5 班
まずは自分たちでできることから考えてみよう。

1. どんな「非常時」が考えられるかな？あなたの家や家族にはどんな影響が出そうかな？

非常時の種類	影響・問題点
地震	停電、燃焼器具の故障
火災	家の損壊
台風・大雨	道路の冠水
洪水	停電、床下浸水

2 家族全員が、無事に過ごせるかな。近所の人とは？今は大丈夫でも、たとえば20年後はどうだろう。

学業される心配なこと 大震災により、在学中の学生 → 休校住宅、建設 " 財源枯竭になる → 保障に入らなくては	解決方法・対策
---	----------------

9 備えあれば憂いなし…備えておくといひものは何かな 知っておくといひことは何かな

調べておくもの・こと 水、乾パン、操中寛刀 ライオ、虫歯薬、救急箱 生布、消火器、暑かけ、タオル	知っておくこと・もの 避難経路、地区、避難場所
---	----------------------------

4 1の中から選んで、〇〇対策10か条を考えてみよう

『地震発生後 対策10か条』

- ① 地盤が沈み、おぼろが
- ② 中が空っぽ、底は、土に沈む、沈み込む
- ③ はやく、非常時に沈んで、道路が崩壊
- ④ 家族の破産
- ⑤ 避難場所に行く
- ⑥ 水や食べ物はない、食料不足
- ⑦ 助けと協力
- ⑧ 保護は、おぼろ
- ⑨ 死、おぼろ
- ⑩ 人命の危機、おぼろ

5 自分一人の力ではできないこと→地域のみんなで協力しよう→それでもできないならば地域行政に
お願いしよう→アイディアを出して地域に賛成しよう→自分のアイディアを賛否のまわづりに
テーマ例「安心して暮らせるまち 岩舟」

テーマ「過ごしやすい街～岩舟～」

具体的なプラン

ア 場所（対象）と理由

子供達に書き手と岩間に住む人々が
過ごしやすい家としてほしいため

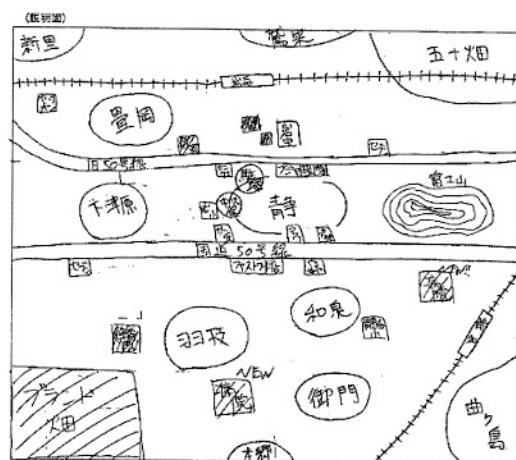
イ 対象者・実施内容

病院の建設
老朽ランドに経路発展
幼稚園・保育園の増築
ファストフード店の増加

ウ 費用（予算の見積もり）

事業費			
修設費		8億 円	
レンタル料・賃貸料		200万 円	
交付費		4億 円	
・人件費	正社員賃 ⑥600万円×600人＝ 非正社員賃②80万円×100人＝	36億 円	
・管理費その他		2億5000万円	
光熱費	5000万 円	総計費	1億 円 水道代 1億5000円
その他	2億 円		
		合計	55億7000万 円

エ その他アピールしたいこと（付加価値が重要かも？）



(解説)

・ブランド向上は、価格、品質改良などから、経済発展を目指す。
・病院を設立し、手帳やお守りの販売、併せて養育院を設立する。
・幼稚園保育園設立をして、人目を惹きつけ、手帳の発售を促す。

- ビニールハウスも使用する
- 色々な材料が入るので、腐食して、厚膜が剥がれ落ちている

作成者 (5 班)

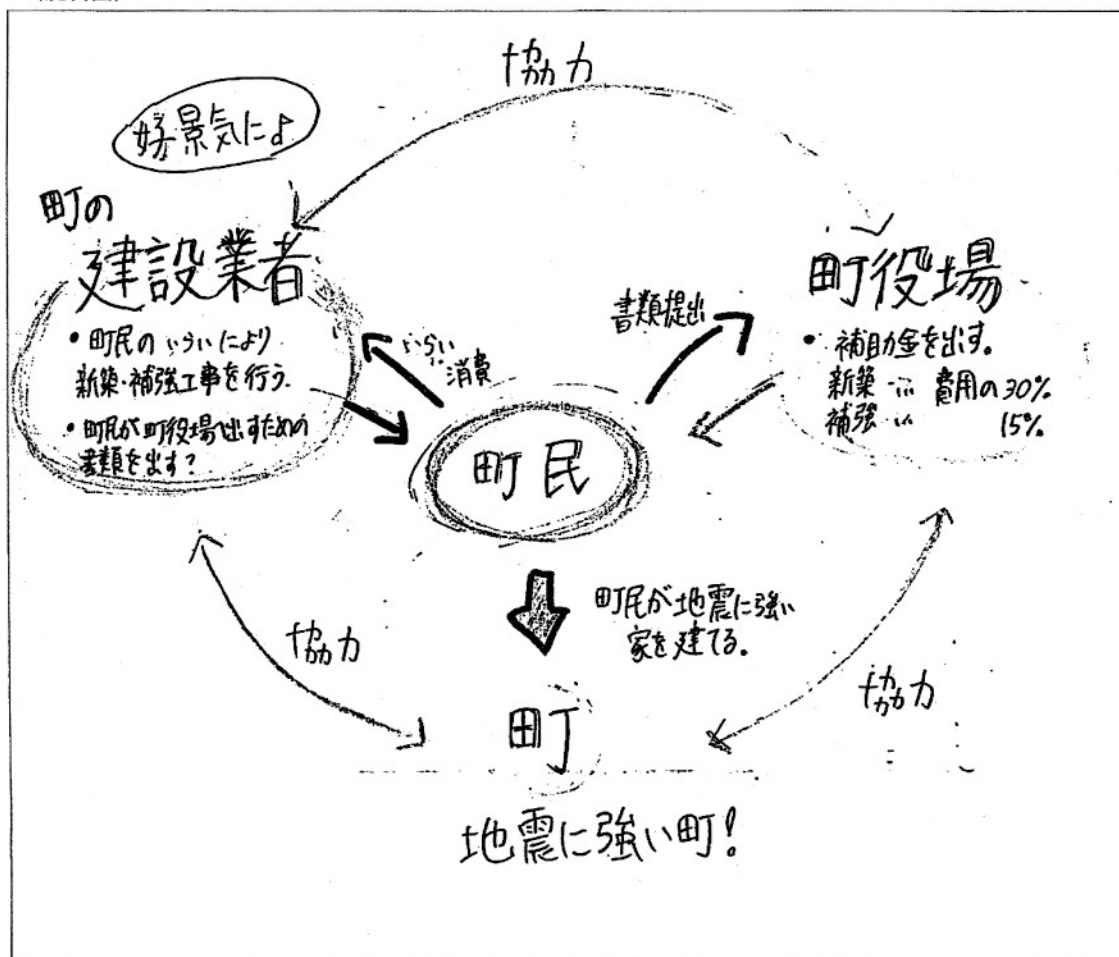
い) い)の両方からしゃべりと考えてあり。それはいいです。通信の要素は5271127

補助資料「説明図」(3で気が付いたことなどを下の岩手町の地図の中に書き込んでください)



資料エ 〈社会科のワークシートの作業例〉

(説明図)



(解説)

私たちが考えたのは「地震に負けない岩舟町」をテーマとした、地震に強い家づくりです。
 東日本大震災後に不足した、仮設住宅の問題も、地震に強い家を作れば根本的に解決され考えた。
 具体的な政策としては、岩舟町全住民の中で、地震に強い建築物を新しく作る人、補強工事する人を対象に
 補助金を出すということです。新しく作る場合は建築費用の30%・補強は費用の15%を町から補助します。
 この政策のメリットは、町から補助金を出すとによって地震に強い家が増える事以外にも
 県内の建築業者が困らなくなることや、町民全体の地震に対する関心が高まる事があります。景気も良くなると思います。

作成者 (2 班)

具体的であり、社会にとって何が必要なのかがよく考えて上手にまとめました!

資料オ 「道徳指導略案」

1 主題名（ねらい） 家族愛 内容項目 4－(6)

父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くよう積極的に協力していくことが大切であるという気持ちをはぐくむ。

※小学校との違い（学習指導要領の内容項目分析から）

家族の中での自分の立場や家族の一員としての自覚を認識した上で、充実した家庭生活を築くことができるようにする。

2 資料名 「頑張るぞ俺達家族！」

『文藝春秋 8 月臨時増刊号』「つなみ 被災地のこども 80 人の作文集」

石巻市 東松島高校 1 年 鈴木啓史（すずきひろふみ）さんの作文から

※資料の題名は、プリントやワークシートでは伏せてある。「家族」というものに対する「俺」の気持ちを資料に浸かることで読み取らせようとしたためである。

3 授業の流れ

〈導 入〉

- ・「普段みんなは、家族のことをどう思っているかな。」
- ・「これは鈴木啓史さんという高校1年生の人の作文です。中学校を卒業したばかりの鈴木さんが、東日本大震災に襲われたときの彼とその家族の話です。」
- ・東日本大震災の資料を黒板に掲示する。

〈価値の追求・把握〉※①～④の問いで「俺」の心情にせまる

学習活動（主な発問）	教師の支援・留意点
・資料を読む。 ① 走るのをやめてしまった母に、「何ふざけた事を言ってんだ！」と言ったときの俺は、どんな気持ちだったのだろう。 ② 小学校で妹を見つけて、真っ暗な中で夜を迎えたときの俺は、どんな気持ちだっただろう。 ③ 学校に迎えに来てくれた父に再会したときの俺は、どんな気持ちだっただろう。 ④ 避難所で、家族8人そろって一夜を過ごしているときの俺は、どんな気持ちだっただろう。	・教師が範読する。 ・本人や母の恐怖心、母親を頑張らせようとする「俺」の「津波に負けまい」とする気持ちに気付かせる。 ・恐怖心と恐怖を隠して妹を守ろうとする「俺」の「兄としての」思いに気付かせる。 ・素直にうれしいという気持ちと、父の子を守ろうとしている姿に共感を覚えている「俺」の気持ちに気付かせる。 ・家族のかけがえのなさに気付かせながら、ねらいに迫る。

〈価値の内的的自覚〉

学習活動（主な発問）	教師の支援・留意点
⑤ 今日の授業で「俺」の気持ちを考えることを通して、みんなは何について考えたのだろう。「 」に何ということばを入れるかな。	・ 答えを拡散させないように、真剣に考えられた生徒を指名する。
⑥ 今日の授業を通して、「(例) 家族」ということに対して、改めてどんなことを考えましたか。	・ どのような態度をもとうとすることが中学3年生として必要なのか、話し合わせる。

〈終 末〉

- ・ 心のノート「家族だからこそ」を読む。

4 授業のねらい

東日本大震災では、多くの人々の尊い命が失われた。鈴木啓史さんも、作文に「俺は大切なものをたくさん無くした。」と書いている。しかし、人間の英知とは、「尊い命をなくした代償に、今後の教訓を考え、より良い未来を創造する」といった、プラスの思考も働くものでなければならない。

我々教員は、このような事件を教訓にして、「自分たちの命を守ろうとする努力や工夫」、「どのようにこれから生きるべきかといった指標」などを学ぶべきである。そしてそれを学校教育の中で、生徒に教え、伝えていく指導をしなければならないはずである。

道徳だけでなく、この道徳の授業で培った心情を他の教科にも生かして、授業を展開していくことが望ましいと考えている。それこそが、道徳の時間を道徳教育の要として位置付けられた趣旨に沿うものであろう。震災に向き合って豊かな人間性を育む心の教育を実践していきたいと考えている。

5 事前・事後の他教科等の学習概要

国語科…「主張を書こう」（6月）題名は自由。テーマが思いつかない生徒には、東日本大震災のことを振り返り、そこから考えたことなどを原稿用紙4枚に書かせた。ボランティア活動から人の温かさ、多くの犠牲者が出たことから「生きる」ということの意味などを考えた生徒が多かった。

社会科…「地方の政治」（10月）震災を振り返り、地方自治体の行政に何を望むか、どのようなまちづくりをすれば良いのかを考えさせた。災害対策、高齢者や子どもにとって生活しやすいまちづくり、エネルギーの供給と節約などを具体的なまちづくりのプランの中に盛り込ませるよう指導していきたい。

総合学習…「岩舟町の提言」（11～12月）これまでの国語科や社会科、道徳の時間の学習の成果を生かしてレポート形式でまとめる。

資料カ 道徳の授業の感想

☆今日の授業を通して、「家族」ということに対して、改めてどんなことを考えましたか。

家族が全員いるということにあたりまえに思うかも知れないけど、本当はとてつもないことで、家族がいるということもほんには思わなければならぬということ。

すごいことに気がつきましたね。そういう家族と
お互い大切にしていきたいと思います。

普段、何事もなく過ごしているけど、こういった震災の事を考えると
当たり前ではないと思う。やはり世界一つの直接、血が繋がっている家族は、かけがえのないもので大切だと思う。

すばらしい感想です。そういう家族の中には
あつていい家族こそ、こういうときにこそ
大切だと思います。

ふだん何気なく、ふつーに暮らしている中でも、いざ
という時には、お互いを心配し大切に思っていること
が改めて分かりました。

本当にそう通りですね。

いつも当たり前のようにいっしょに過ごしている家族という
存在にかけがえのないものなんだと思った。

それが大切にしていこうと思う。

と、その家族は、仲良く、ふだんから
支え合って生活しているもんね。すごいことです！

今のこの家族の状況が、今回の地震でいつまでも続くものじゃないと感じました。
だから私は、今の家族を大切にしていきたいと思いました。ケガしても何かあっても、ずっと大切にしていきたいです。

Good!

資料キ 「総合的な学習の時間の作品内容」

- ・岩舟町の人口と高齢化について調べ、病院のあり方を考えた。総合的な医療が受けられる病院を建てることを提言し、社会福祉への理解を深めた。(1組H. O)
- ・岩舟町に循環バスを運行して、高齢者や観光客が利用できるようにし、町の活性化と高齢者に優しい町づくりをする計画を提言した。(1組N. S)
- ・岩舟町の外灯設置の状況について、実際に道を歩き、明るさや歩きやすさを体験しながら、よりよい町づくりを模索した。(2組M. A)
- ・岩舟町の医療について考え、救急センターなど高度な医療技術をもつ近隣の地域について調べ、医療や福祉に関する提言をまとめた。(2組A. K)
- ・岩舟駅と静和駅を利用者の立場から利用しやすい施設になるよう、駅舎と駅周辺を造り替える計画を提言した。(2組H. S)
- ・原子力発電に代わる発電として、太陽光発電や地熱発電による電力を岩舟町に供給することを提言するレポートを作成した。(2組Y. W)
- ・東日本大震災からエネルギー資源の節約について、その方法を具体的に調べ、表にまとめて岩舟町への提言の資料を作成した。(3組Y. I)
- ・東日本大震災の影響で崩れた岩船山の様子から、さまざまな安全対策について考察し、町づくりの提言をレポートにまとめた。(3組Y. U)
- ・多くの子どもたちが元気に外で遊ぶための、特色ある公園造りについて考察した。他の市町村にある大きな公園をイメージして提案した。(3組Y. K)
- ・高齢化が進む岩舟町の実情を捉え、生活上不安を感じる箇所を高齢者の立場で考えながら、岩舟町を住みよい町に造り替える提言をまとめた。(4組M. I)
- ・岩舟町の安全性と利便性をテーマに、岩船山や道路工事の利点と改善点を挙げ、公共事業の難しさについて指摘するレポートをまとめた。(4組K. Y)
- ・震災の教訓を生かして、将来の大型地震に備える方法を実際の生活上での出来事をもとにレポートをまとめた。(4組T. S)
- ・防災意識を高めるための学校や地域での取組を提案するレポートを作成した。(4組N. F)

VI 成果と課題

1 成 果

- (1) 東日本大震災を教訓として、体験学習と道徳、社会科や総合的な学習の時間と道徳の関連が図られ、豊かな人間性を育むことができた。
- (2) 被災地の小学生との直接体験となる交流活動や被災地の実体験を扱った資料を扱うことで、子供たちの心に深くしみ込んだ授業を実践することができた。
- (3) 個人の研究としてだけでなく、学校全体さらに地区の研究会などで研究を進めることができ、今後の研究・実践につながるものとなった。

2 課 題

- (1) 町主催の取組を学校主体の取組へと、また、学年の取組を学校へ、さらに学校から町全体への取組へと広げ継続していきたい。
- (2) 東日本大震災を題材として扱うことは、まだまだ生々しくてもう少し落ち着いてから扱いたいという慎重論もある一方、多くの犠牲を無駄にしないためにもこの教訓を風化させてはならないという使命論もある。地域や学校、学級の実態に応じて柔軟に扱う必要がある。

VII おわりに

本教員部は、県内各地区より年毎に選出された14名の部員からなる小さな研究組織であるため、部員だけの研究では限界がある。幸いにも、今回の玉生小学校の実践では、塩谷町と女川町の町主体による交流事業として学校全体で取り組んでいただき、また、岩舟中学校では森口部員の呼びかけで社会科・道徳・総合的な学習の時間において3学年全クラスで同じ授業を実施していただくなどの協力が得られ、本研究資料をまとめることができた。おかげで、前述したような研究成果を挙げることができたものと思う。

しかし、今回の研究は、研究期間も短く、事例を提供していただいた二つの学校の実践のみに依るところが大きい。教員部としてこの震災をどう捉え、どのように扱い、どのような価値に導いていくことがよいのかなどの検討もまだまだ不十分である。また、研究の課題にも述べたように、先の大震災を直接題材としてよいのか、或いは、どの程度に扱えばよいのか。また、県内の他の小・中学校でも、被災地の方々との交流や震災の教訓を生かした事例などがあるのではないかなど、検討したり、情報収集したりと、やらなければならないことは多い。

この全日教連教研大会で皆様からいただいた忌憚のないご意見やご感想をもとに、教員部として今後の研究の方向性などについてさらに検討を重ね、各学校において真に役に立つ、有益な研究を実践していけるよう、努力していきたいと考えている。

結びに、本研究に快くご協力いただいた玉生小学校や岩舟中学校の先生方及び関係各位に深く感謝を申し上げ、おわりのあいさつに代えたいと思う。